グラントの思弁的実在論
――ハーマンのグラント批判によせて――

浅沼　光樹

> 力（パワー）がなければ所産（プロダクト）はないであろう。しかし逆は真ではない。〈もの〉が〈力〉を根拠づける ground のでもなければ、〈力〉が〈もの〉を根拠づけるのでもない。もし実体的なものが究極のものと見なされているなら、〈力〉はこのことを無根拠化 *unground* するのである。したがって〈力〉は〈オブジェクト〉の生成を消去するどころか、それを不可欠のものとする。(Grant, 2011, p. 46)

> 〈掘削 mining〉は〈下方解体 undermining〉ではない。それはありとあらゆる〈オブジェクト〉にとって〈先在態 anteriority〉がなくてはならないことを暴露するのである。 (Grant, 2011, p. 45)

0. はじめに

四人の最初の思弁的実在論者、ブラシエ、グラント、メイヤスー、ハーマンの思想上の関係はどのようなものであろうか。もし彼らの相互関係について網羅的な考察を企てようと思えば、六つの組合せのおのおのについて分析をおこなわなければならないのかもしれない。しかしここではもっぱらグラントとハーマンの思想的関係の解明に論点をしぼることにしよう。

ところで両者の関係にかぎっていえば、当人同士がこの問題について意見を交換しあったことがある。2011 年の論集『思弁的転回』にはハーマンによる比較的長いグラント批判 (Harman, 2011) とそれに対するグラントの簡潔な応答 (Grant, 2011) がおさめられている。両者の思想的立場の内的関係を考えるには、この二つの論考は絶対に外すことのできない基礎資料の一つであろう。

しかしこれらの論考におけるハーマンとグラントの応酬にはいささか隔靴掻痒の感を禁じえない。結局、その応答によってグラントはハーマンの疑念を完全に払拭しえたのであろうか。巻頭論文「思弁的哲学へ」(Bryant, Srnicek, and Harman, 2011) はこの論集全体にとって総論ないし導入の役割をにない、その一節は本書に収録されている論文の要旨にあてられている。当然そのなかにはハーマンに対するグラントの応答についての要旨も含まれている。しかし何度読んでも私にはこの要旨が――たしかにキーワードは網羅しているものの――グラントの真意を十分に汲んでいるとは思われなかった。私にはこの要旨が今もなお標準的な――つまり一般の読者の――理解の指標のように思われてならない。

ところで、グラントの応答が必ずしも分かりやすいものではないとすると、その理由はどこにあるのだろうか。語られている思想内容だけにその責を負わせるわけにはいかないであろう。この応答が必要以上に難解になっているならば、グラントの論述にも原因があるのではないだろうか。この二つの論文を何度か読み返しているうちに、そのような考えが私に浮かんできた。その後、次第にこの念は強まり、ついにグラントの応答の要旨を自分なりに書き直したいと思うようになった。

この再構成の作業は、私には不十分と思われた要旨をグラントの真意を反映した、より平易なものに書き改める作業であると、そのように考えて貰ってかまわない。しかし本稿は要約というにはあまりに長くなった。試行錯誤をくりかえすうちに、最初にグラントの思弁的実在論の特徴を直截に提示するのがよいのではないか、と思い至ったからである。したがって目の前にある〈要旨〉は実質的にいって、ハーマン

のグラント批判に即した〈グラントの思弁的実在論〉の解説と呼ぶのがふさわしい内容になっている。とはいえ、最後に念の為に申し添えておくならば、この〈概説〉はグラントとハーマンの思想的関係の解明の工程の一つという意味をいまなお完全に失っているわけではないのである。

1. グラントの思弁的実在論

1.1. 相関主義批判

思弁的実在論の四人のオリジナルメンバーは全員が相関主義に反対の立場をとっている、あるいはそれを克服しようとしていると言われている。相関主義を批判し、それを克服するということは、たんに主観との相関関係における実在（客観）ではなく、そのような関係の彼方にある〈実在そのもの〉を指向し、それを認識――つまり思弁的に把捉――しようとするということである。

しかし相関主義をどのように乗り越えるかによって、彼ら四人の立場は互いに相違してくる。たとえばハーマンの場合には相関主義の批判に関係主義一般の批判が結びついている。周知のように、ハーマンは人間も〈もの〉も無差別に〈オブジェクト〉として捉える。しかしこれによってハーマンは、〈もの〉を人間との関係に解消するという意味での相関主義だけではなく、〈もの〉を〈もの〉相互の関係に解消するという意味での関係主義も同時に否定しようとしている。このような見地からするならば、ハーマンの考える実在そのもの（オブジェクト）は、人間中心的な観点と関係中心的な観点を同時に乗りこえる地点に設定されている、とも言えるかもしれない。

ところで、ある意味でこれと似た事態がグラントにも見てとられる。グラントにおいても相関主義と同時に否定されるものがあるからである。それが生命中心主義 biocentrism と呼ばれる立場に他ならない。このように相関主義とともに生命中心主義を否定、克服しようとする点に、あるいはむしろ相関主義批判を生命中心主義批判として展開する点にグラントの思弁的実在論の最大の特徴が見出される。

1.2. 生命中心主義批判

グラントにおいて相関主義に相当するのはロゴス中心主義 logocentrism である。これが意味しているのは、実在がつねに人間の意識あるいは言語活動との関係において捉えられている、ということである。そしてグラントはこの関係性の外部へ出ようとしているのだから、ここまでは相関主義批判のプログラムと基本的に合致している。しかし人間の意識や言語活動との関係をまぬがれているように見えても、実在が生命との関係において捉えられている限り、主観的なものとの関係を完全に脱しているわけではない。人間の認識活動が（有機的）身体とその生命活動に支えられることによって成立しているとしよう。もしそうならば、ロゴス中心主義の根は身体的生命そのものにある、とも言いうるからである。したがって、グラントにおいては第一レベルの（あるいは表層の）相関主義批判は、人間の精神的活動を生命活動に根ざすものと捉え――すなわち人間を身体的存在と見なして――それによって人間そのものを自然の内部へ、自然の一部を構成するものとして置き入れる、という役割しかもっていない。しかしここからがある意味で本当の相関主義批判の始まりである。つまり第二レベルの（あるいは深層の）相関主義批判として生命中心主義批判が控えており、この批判によって相関主義の根が、つまりわれわれの身体的生命に深く根を

下ろしている相関主義がその根元から断ち切られなければならないのである。

もっと具体的に考えてみよう。グラントの場合にもカントは相関主義の代表である。カントの超越論的観念論においては、感性に与えられる直観の多様に直観および悟性のアプリオリな形式が適用され、その綜合の結果として現実の世界（現象界）が構成される。しかしこのような構成の作用は動物の世界にも見出されないだろうか。そこでもし仮にこの作用を最も下等な生命にまで辿りうるとしてみよう。そうすると複雑さの度合に程度の差はあるかもしれないが、どの階層においても生命はつねに自己中心的に世界をとらえ、種のアプリオリな関心に基づいて世界を分節している、ということになろう。だとすると少なくとも生命――それは有機的身体と外延を等しくする――の次元にとどまる限り、われわれは真の意味で脱中心化された世界には、つまり実在そのものには出会わない、ということになるだろう。

このような観点からすると、人間において相関主義を否定しつつ、同時に生命一般においてそれを否定しないのは不徹底であろう。したがって、もし相関主義批判がみずからを貫徹しようとするならば、知性のみならず有機的身体までも視野に収めなければならず、その意味でロゴス中心主義の批判は生命中心主義の批判にまで徹底されなければならないのである。

1.3. 実体論批判としての無制約化

けれどもそうすると、いったいどうすればわれわれはこの生命中心主義を克服しうるのであろうか。既に見たように、生命中心主義とは生命がそのアプリオリな関心に基づいて世界を分節することである。しかしそれは世界を任意のまとまりとして――要するに〈もの〉として――捉えることに他ならない。このようにして生命の前には常に複数のまとまり（〈もの〉）からなる世界が広がっている。このような世界の見方をグラントは物体主義 somatism と呼んで批判の俎上に載せている。ただし言うまでもなくそれは、このような世界の見方がその生命中心主義的な分節の結果であり、どこまでもそれと表裏一体であるからである。こうして〈生命中心主義〉批判は〈物体主義〉批判として遂行される。後者を通路として前者の克服が目ざされるのである。

ではあらためて〈物体主義〉の克服はどのようにしてなされるのだろうか。その手続きをグラントは〈無制約化 unconditioning〉と呼ぶ。この概念は――総じて〈もの das *Ding*〉の領域には〈無制約的なもの das Unbe*ding*te〉は見出されない、なぜなら〈無制約的なもの〉は〈もの〉化する be*ding*en（制約する）ことの不可能なもの das *Un*bedingte だからである――という初期シェリングの議論に由来している。したがってグラントの〈無制約化〉とは〈もの das Ding、the thing〉の〈もの〉性を否定して〈もの〉以前のものへ、すなわち〈無制約的なもの das Unbedingte、the unthinged〉へと到達することである。このように《〈もの〉を〈もの〉でないものに引きもどす de*thing*ifying》(cf. Gratton, 2014, p. 115) ということがグラントのいう〈無制約化〉という手続きの具体的内実である。

さてこのように段階的に〈無制約化〉を押し進めていくと、いずれわれわれは最後の〈もの〉に直面せざるをえない。最も基底にある〈実体〉としての世界である。これについては次のように説明できるであろう。生命一般は世界をそのアプリオリな関心に従って分節する。しかし一方で生命はそのような〈もの〉（＝かたち）がそこにおいてある場所（＝地）もまた一つの形あるまとまり（＝〈もの〉）として捉

える。〈無制約化〉の果てにわれわれの前に最後に立ちはだかるのは、この最も一般的で包括的な〈もの〉である。しかしこれが意味しているのは、生命中心主義の中枢にあるのが結局のところ、この世界という〈もの〉であるということである。世界の実体的統一は生命の自己中心性そのものの投影である、という言い方もできるであろう。したがっていずれにしてもこの〈地〉が崩落するなら、〈もの〉はそれが〈もの〉として存立する（見られる）ための最終的な基盤を喪失し、その上に描かれているさまざまな図も――そのようなパースペクティブを開いている生命のアプリオリな関心そのものとともに――一緒に崩れ落ちるであろう。このような観点からグラントは〈無制約化〉を中期シェリングの言葉を借りて〈無底化 Ungrounding〉つまり〈自己の拠って立つ基底を取り除くこと〉とも表現している。

1.4. 力の存在論

このようにグラントの〈生命中心主義批判（としての相関主義批判）〉は〈世界の実体的統一そのもの〉の否認へと至る。その彼方に開けるのはさしあたり〈形なき世界〉であり、端的に〈自然〉とも呼ばれている。この自然についてはさまざま特徴づけが可能であると思われる。たとえば「実在の流砂 the shifting sands of reality」 (Gratton, 2014, p. 113) という言葉はこの〈形なき世界〉の一面を捉えていると言えるかもしれない。しかし脱生命中心主義というグラントの相関主義批判の根本動向を踏まえるならば、最も重要なのはやはり生命との非対称性であろう。このような非対称性は次の三つの意味において〈生命による自然の中心化の不可能性――あるいは端的に言えば――その制御不可能性〉としてあらわれる。

第一に、この自然は生命を生みだすかもしれないが、そうしないかもしれない。言いかえると、あらゆる相関主義の向こう側に見出される〈自然〉は生命そのものではなく、その可能性にすぎない。より先鋭化して言えば、〈自然〉とは生命を定立しない可能性である。

それにもかかわらず第二に、生命が生みだされるとしたら、生命はこのような自然の上に存立しているために――あるいはより厳密な言い方をするとむしろ自然そのものであるために――生命は自然をどこか別の場所に追い払うことはできない。これは言いかえると、生命そのものが前生命的なものを含む――あるいはむしろ前生命的なものである――ということである。この〈前〉が〈非〉や〈反〉に容易に転化しうることを考え合わせるならば、生命は自己制御不可能性そのものであるとも言えよう。

したがって第三に、この自然は生命が任意に分節することを許さない。むしろ自然はそれ自身によって世界を分節する。その限りにおいて自然は――無形であるどころか――形を定立するはたらきそのものである。しかしその分節は生命による分節とは必ずしも重ならない。自然そのものによる分節のはたらきは、生命にとっていわば決して鳴りやむことのないノイズである。生命の秩序はこのノイズによっていたるところで寸断されている。

ここまで主としてわかり易さを心がけながら――そのため場合によっては省略や誇張も恐れずに――脱生命中心主義という基本動向を軸に据えてグラントの思弁的実在論の特徴を解説してきた。それを踏まえて次に本題である〈グラントに向けられたハーマンの疑念〉および〈それに対するグラントの応答〉の内容を見ていくことにしよう。

2. ハーマンへの応答

2.1. 下方解体と掘削

グラントに対するハーマンの根本的な疑念は、彼が下方解体者（アンダーマイナー）の一人なのではないか、ということである。〈下方解体 undermining〉とはハーマンが〈オブジェクト〉と呼ぶ一種の「個体的実体」（Harman 2011, p.37）をもはや〈オブジェクト〉とは言えない一層基礎的なもの——より深いもの——へと還元するという意味で言われている。

グラントは自身の思想的立場が〈掘削 mining〉を前提としていることを否定していない。〈掘削〉は〈無制約化〉と内容的に同一の手続きである。しかし一見似てはいるけれども〈掘削〉は〈下方解体〉と必ずしも同じではない。というのも〈掘削〉は〈オブジェクト〉を何か別の、より基礎的なものへと還元しているわけではないからである。〈掘削〉によってわれわれが直面するのは〈世界の実体的統一の不在〉〈世界の無底性〉そのものである。〈掘削〉は〈オブジェクト〉をより基礎的なものへと還元するどころか、そのような基礎的なものがないということへと至るのである。

> もし…「掘削のプロセス」が、あらゆる〈オブジェクト〉の核（コア）は〈無底性〉に開かれている、ということを発見するとしたら、それはまさに「世界の最基層」や「究極の基体」つまり〈万物がそれに最終的に依存している実体〉がないからなのである。(Grant, 2011, p. 44)

既に述べたように〈掘削〉は内容的には〈無制約化〉と同一である。しかし〈掘削〉には独特のニュアンスがある。〈掘削〉の本来の意味は〈地表〉を掘ることである。しかし〈地表〉を掘るというのは地球をその核（コア）へと向けて掘り崩すことである。地球が生命を育む〈母なる大地〉とか、さらにはそれ自体が〈一個の生命体（ガイア）〉と見なされる場合があることに留意しよう。このような含意のゆえに〈掘削〉やそれに基づく〈地質学 geology〉はグラントの思弁的実在論にとって象徴的な意味をもつことになる。というのも、地質学は先立つものを必然的に定立することによって地球が、つまり生命が「真のプリウス」 (Grant, 2011, p. 44) ではないことを示唆しているからである。

ハーマンのグラント批判はこの〈下方解体〉批判に尽きると言ってもよい。ゆえにこれに対するグラントの返答も基本的には〈掘削〉によって与えられている。〈下方解体〉が〈より根本的なもの〉へと還元するという意味であるならば〈下方解体〉はおこなわれていない、というのが彼の返答である。しかしハーマンは〈下方解体〉批判をさらに二つの批判によって変奏している。〈前個体主義〉批判と〈機会原因論〉批判である。この変奏に応じてグラントの返答もその焦点を変え、それにともなって彼の思想的立場が別の角度から照らし出されている。

形式的に言えば、グラントの返答は次のような仕方でおこなわれている。つまり、A が B へと還元されているというハーマンの批判は、それ自身が A と B の二元論に基づいている。ゆえに彼の批判に対してグラントは、自分はそもそもそのような二元論を採用していない、と反論することになる。この反論の根拠は、A がそれへと還元されると言われているもの＝B はそもそも存在しない、ということにある。しかしそうであるならば、さらに一歩踏みこんで、A と B の関係が非二元論的に再定義されなければならない。これをグラントは〈B を A へと非二元論的に編入し、A の別の見方を提示する〉という仕方でおこなって

いる。

2.2. 前個体主義と先前性

ハーマンによるグラント批判の第二の論点は〈前個体主義 pre-individualism〉である。ここではグラントの立場が一種の質料主義 materialism ではないか、つまり、形ある〈もの〉（〈もの〉のかたち＝形相）を無形の、つまりいまだ具体的な形をもっていない質料の大海へと融解させているのではないか、ということが疑われている。

既に見たように、グラントの〈掘削〉は〈無制約化（＝脱〈もの〉化）〉という手続きによっておこなわれる。しかしその目的は〈実体的なものの見方〉そのものを解体し、われわれを世界の無底性（実体的統一の不在）へと導くということにある。だから厳密に言えば〈掘削〉の作業のあいだわれわれはどこにも〈前個体的なもの〉を見出さない。むしろこのように行く先を見失った結果としてこれら二つのもの（個体的なものと前個体的なもの）の二元論的関係が、言いかえると形相と質料という二元論そのものが解体され、さらには再定義されるのである。

このような形相と質料の関係の脱二元論的な再定義において〈質料的なもの・前個体的なもの〉と呼ばれていたものに新たに与えられる呼称が〈先在態 anteriority〉である。〈下方解体〉が〈掘削〉によって置き換えられなければならなかったように、前個体的なものは〈先在態〉によって置き換えられなければならないのである。しかし〈先在態〉はもはや形相と対立する質料、現実態と対立する可能態ではない。むしろ拡張を被った現実態 actuality そのもの、現実態の「生成モデル」 (Grant, 2011, p. 41) である。

この《拡張》現実態＝〈先在態〉についてグラントは《どの時点においても汲みつくされていない》と説明している (cf. Grant, 2011, p. 43)。

《汲みつくされていない》という特徴づけはそれほど理解しにくいというわけではない。形相に対立する質料は伝統的に〈形相を受けとるもの〉〈受動的なもの〉〈不活性なもの〉と見なされてきた。これに対して形相に対立しない質料はむしろ〈形相をみずから産出するもの〉〈能動的なもの〉〈力〉である。だとするならば、この「汲みつくされなさ（＝無尽蔵性）」は端的に言って「先在態」が無限に〈自己生成するもの〉（自分で自分にかたちをあたえるもの）である、ということを意味している。

しかし《どの時点においても》とはどのようなことであろうか。この言葉がわかりにくいとすると、そのわけはこの時間がわれわれの時間（われわれの継起の秩序）ではないからである。つまり相関主義的に人間との関係というだけでなく、生命中心主義的に生命との関係においてとらえられた時間でも、それはないからである。それは時間そのものであるが、しかもそのような時間が自然の時間であり、この時間を念頭に置いて《どの時点においても》と言われているのである。このようにわれわれのものではない時間における存在（自然）を後期シェリングは〈思惟によって先まわりして捉えることのできないもの das Unvordenkliche〉——ドイツ語の日常的な意味では〈考えの及ばないほど古いもの〉——と呼んだ。しかしこのように思惟——われわれの文脈では生命——には把捉不可能な〈継起の秩序〉において生起するというのであれば、これは事実上、思惟（生命）にとってこの〈自然の自己生成〉を内的に拘束しているプログラムがない、というに等しいであろう。しかし言うまでもないが、このわれわれのものではない時間

がわれわれと別のものではない（なぜなら、われわれは自然そのものなのであるから）ということが要点なのである。

2.3. 機会原因論と〈存在の生成〉

ハーマンの第三の論点は〈機会原因論 occasionalism〉である。〈前個体主義〉批判を表とするならば、〈機会原因論〉批判はその裏面とも言うべきものである。既に述べたように、ハーマンは〈前個体主義〉を個体としての〈もの〉を〈前個体的なもの〉に解体・還元することであると解していた。この解体・還元がまたしても槍玉に上げられている。もっとも論点は形相（現勢）と質料（潜勢）の問題から個体の相互作用の問題（因果関係の問題）へと推移している。つまり今度は、〈もの〉である限りの〈もの〉から相互作用する力が剥奪されて、より基礎的なものとしての質料（事物の質料的統一）が〈もの〉に代わってその相互作用（因果関係）をおこなっているのではないか、ということが疑われているのである。もちろんこれを機会原因論と呼ぶのは、本来の――つまりマールブランシュに見られるような――機会原因論の定義と一致しないように思われる。けれどもハーマンは G・ブルーノやグラントもまたこのような質料主義的な、つまり前個体主義的なタイプの機会原因論である、と考えるのである (cf. Harman, 2011, p. 37)。

既に見たように、グラントはそもそも世界が実体的統一をもつとは考えていない。したがって〈世界の事物が前個体的質料によって統一されている〉とも見なしていない。それゆえ機会原因として働くべき基体がグラントの場合にはそもそも存在しない。さらにこれにともなって形相と質料、現実態の可能態の二元論も解体され、拡張された現実態である先在態へと一元化され、その〈力〉のダイナミズムは〈無制約的なもの〉――どの時点においても汲みつくされないもの――と捉えられていた。しかしこのときもはや〈力〉や〈生成〉以外に〈ある〉と呼べるようなものは何もない。つまり〈生成する〉ということが〈存在する〉ということなのである。このような存在と生成の非二元論的な関係をグラントはプラトンに倣って「存在の生成 the becoming of being」(Grant, 2011, p. 46) と呼んでいる。

それでは、これによってグラントは機会原因論に陥ることなく〈もの〉としての〈もの〉の相互作用を説明している、ということになるのだろうか。たしかにグラントは〈もの〉の世界から〈力〉の世界へと移行する。なるほどこの世界は底なしの「実在の流砂」のように見えるかもしれない。しかし〈力〉の世界はただちに無限の形態化 formation、差異化 differentiation の世界である。だとするならば、あらかじめ分離していないことを恐れる必要はない。あらかじめ分離しているのではないとしても、〈もの〉はその〈力〉のゆえに相互に分離しうるからである。つまり〈もの〉はあらかじめそのように分割されているのではないという仕方で不断に分割しつつある。あるいは〈もの〉は〈もの〉との境界を絶えず変化させながら、そのようにして相互作用しあうと言ったほうがよいかもしれない。もちろんその場合に、そのつどの形態化・差異化の〈力〉はそれが生みだすもの――後から生じるもの――の完全な所有物であるとは言えない。なぜならこの〈力〉は後から生じるものの可能性だからである (cf. Grant, 2011, p. 43) 。それゆえ、ここでは〈力〉の独占的な（排他的な）所有者が作用の前提条件として考えられているわけではない。たしかにその意味では、ここで考えられているのは特殊な因果関係であるかもしれない。しかしそれは少

なくともハーマンが批判する意味での機会原因ではない。なぜならば、この分節のはたらきを仲介するものがこのはたらきの外部に想定されているわけではないからである。また水平的な因果性の説明に代えて新プラトン主義的な垂直的な因果性の説明を置いているというのも正しくない (cf. Harman, 2011, p. 36) 。むしろこの二つの方向性が一つに縒りあわされているところにこそ、この因果性の眼目がある (cf. Gratton, 2014, p. 116) 。

しかしそれではハーマン自身はどうなのか。「非分離 nonseparability」 (Grant, 2011, p. 46) に対する恐れから〈もの〉の形に固執するならば、カントがライプニッツを批判したように、〈もの〉の形は自分が自分に与えたもの（自身の内的な生成の結果）ではなくなり、自分以外のものから既に出来上がったものして与えられたもの（他者からの外的な付与の結果）になりはしないだろうか (cf. Grant, 2011, p. 43) 。またこのような世界は全てが既に出来上がっている世界――仮にもし〈先〉と〈後〉が考えられたとしても、それもたんなる観念的な区別にすぎないような――（畢竟ヘーゲル的な）世界ではないだろうか (cf. Grant, 2011, p. 43-44) 。そしてこのような真の意味で時間的に生成変化することのない世界においては、〈もの〉は相互に作用する〈力〉を奪われ、不能 impotent になってしまうのではあるまいか (cf. Grant, 2011, p. 42) 。もしそうならば、機会原因論に陥ることなく〈もの〉としての〈もの〉の相互作用を説明しているのか、という最初の問いは、むしろハーマンに対して向けられるべきであろう。

> 〈下方解体〉という立場に対するハーマンの批判の要点は、〈下方解体〉が「馬や鉱物からいっさいの力を奪いとってしまう」ということである。言いかえると、〈オブジェクト〉が「生れながらの産出力」をもつということを、ハーマンの形而上学はあきらかに必要としているわけである。したがって、ハーマンに対する私の問いは私に対するハーマンの問いとまったく同一である。すなわち、オブジェクト指向モデルを採用するならば、彼の言うように〈オブジェクト〉が力をもつということはいかにして考えられうるのか。 (Grant, 2011, p. 42)

3. グラントの応答の主旨

以上の考察を踏まえてハーマンのグラント批判の問題点を述べよう。そうするとその根本の問題は、グラントの思弁的実在論の〈相関主義批判〉と〈力の存在論〉という二つの位相を明確に区別していない、ということにあるように思われる。このような事態を招来しているのはグラントにも責任がある。ペーパーバック版の「序」で彼自身が説明しているように、グラントの『シェリング書』においては後者の側面は十分に展開されていない (Grant, 2008, p. vii) 。またその前提の上での話になるけれども、この応答においては〈解体〉と十分に展開されていない〈構築〉の間で議論がシームレスに移行する場面が多々見うけられる（それはおそらく〈解体〉の正確な理解が十分に展開されていない〈構築〉のそれにつながると考えているからであろう）。それにもかかわらず相関主義の解体とその後に構築される形而上学本体とは――内容的には重なり合う部分があるとしても――事柄としては区別されるべきである。そしてこの位相の〈ずれ〉に留意することがグラントの議論の筋道を見失わないための最良の道であるように思われる。

その上で再びハーマンに目を転ずると、〈オブジェクト指向存在論〉は相関主義批判というより、その先に構築される形而上学に相当する。したがってハーマンは、自分自身は〈構築〉の側に身を置いてグラ

ントの〈解体〉作業を批判しており、そこに一種の捻れが生じている。そこでたとえば、もし万が一解体作業の過程である種の二元論を容認しているかのような見かけが生じるとしても、それは最終的にそれらを否定するためなのである。だからハーマンのように、この種の二元論を議論の前提としたままで、その撤廃にまで進まなければ、グラントの真意からは遠ざかることになる。

このようにハーマンとグラントとの間で〈解体〉と〈構築〉の対応関係に捻れが生じていることが、二人の話が噛み合わない最大の原因であるように思われる。しかし逆に言えば、この捻れそのものが最初に解消されるべきだ、ということにもなる。つまり、われわれはグラントの〈力の存在論〉をハーマンの〈オブジェクト指向存在論〉と比較すべきなのである。既に述べたように、グラントの〈力の存在論〉は十分に詳細に展開されているわけではない。それにもかかわらず、この捻れが解消されるだけでも、最低限のという限定つきではあるにせよ、必ずしも不毛でない対話が両者の間に成立しうるのではないだろうか。たとえば、グラントの〈力の存在論〉において〈オブジェクト〉は解体されているのであろうか。ハーマンの〈オブジェクト〉と完全には同一視できないとしても、グラントの〈力の存在論〉においては〈自然そのもの〉による世界の分節までもが否定されているわけではない。さらに言えば、この〈自然そのもの〉による世界の分節は、〈もの〉を〈もの〉として相互に区別するだけでなく、それらを相互に関係させる——無限に再分節・再関係させる——一種の特殊な因果関係という意味ももっているように思われる。他方〈オブジェクト指向存在論〉においても実在的オブジェクト間の一種の因果関係として〈代替因果 vicarious causation〉が重要な主題とされている。それ以外にも〈魅惑〉や〈退隠〉などの〈オブジェクト指向存在論〉に固有の概念と思われるものも、グラントの〈力の存在論〉側に——一致するとまでは言わないとしても——対応する概念を見出すことができないかどうかは——おそらくハーマンでもグラントでもない——われわれ自身がよく考えてみなければならない問題であると思う。

いずれにしてもグラントがあの短い応答のなかでハーマンに言いたかった事は、結局私が今述べたようなことではなかったかと推察する。つまり、ハーマンの〈オブジェクト指向存在論〉と比較・対照されるべきであるのは、相関主義批判ではなく〈力の存在論〉そのものだ、というのが、この応答の主旨だったのではないだろうか。〈オブジェクト指向存在論〉においては〈力〉の問題はどうなっているのかと問いかけ、まさにそれが〈代替因果〉が問題となる箇所だと述べるとき (Grant, 2011, p. 46) 、グラントが暗示していたのは、そのような本来の対決の場であったように思われる。グラントの言葉を借りれば、そこにおいてこそ「われわれの意見の相違」 (Grant, 2011, p. 41) は問題とされうるのである。——しかしそうであるならば〈要旨〉もまたこの点にふれるべきであったろう。

文献

Bryant, Levi; Srnicek, Nick; and Harman, Graham. (2011). 'Towards a Speculative Philosophy', in Bryant; Srnicek; and Harman. (Eds.), *The Speculative Turn: Continental Materialism and Realism* (pp. 1-18), Melbourne: re.press.

Grant, I. Hamilton. (2008). *Philosophies of Nature after Schelling*, London and New York: Continuum.

——.(2011). 'Mining Conditions: A Response to Harman', in *The Speculative Turn* (pp. 41-46).

Gratton, Peter. (2014). *Speculative Realism: Problems and Prospects*, London, New York, Sydney and New Delhi: Bloomsbury.

Harman, Graham. (2011). 'On the Undermining of Objects: Grant, Bruno, and Radical Philosophy', in *The Speculative Turn* (pp. 21-40).